ポールJ・グリッフィス教授の方法論

小谷信千代

本書（*On Being Mindless: buddhist meditation and the mind-body problem*, Open Court 1986）はポールJ・グリッフィス教授（Paul J. Griffiths）の処女出版である。著者は本邦では未だあまり知られていないように思われる。そこでAcknowledgementsに従って簡単に教授の研究経歴を紹介しておこう。

著者は、オックスフォード大学（トゥリニティカレッジ）に於ける五年間（一九七五―八〇）の神学とサンスクリット語の学習によって、今日に至る研究生活を開始した。Trevor Williams博士から宗教学を、Richard Gombrich博士から仏教学とサンスクリット語を学んでいる。その後ウイスコンシン大学で仏教学を学び、ここで学位を取得した。指導に当ったのは清田実博士である。ウイスコンシンで著者は例えばチベット仏教ゲールク派の学僧Geshe Sopaなどの多くの仏教研究者に出会っている。折からウイスコンシンに留学中の袴谷憲昭教授から受けた、インド仏教文献に関する読解法の訓練は著者のそれ以後の研究に多くの影響を与えたようである。

さて、本書の内容を紹介しよう。その第一の特徴は、仏教文献の読み方に関する著者の問題意識の明晰さにあるように思われる。以下この点を中心として、Introductionに基づいて著者の問題意識のありかたを見てゆくことにしたい。

本書の主題は、瞑想行によって達成される滅尽定（nirodha-samāpatti）を仏教徒がどう考えてきたかということを文献の事例に基づいて検討することである。瞑想行が仏教にとって基本的に重要なものであるということは、西洋でもよく認識されているが、しかしそのことが結果的には哲学的な論証の欠如を招いたり、論理矛盾に対する認識の欠如をもたらしたのである、と西洋ではともすれば考えられがちである。しかし乍ら、他ならぬその瞑想行から仏教哲学の体系的な理論は始まっており、従って仏教哲学を考える場合には、瞑想行との関係を考慮しないわけにはいかない。且つまた仏陀自身が、瞑想体験の重要性を強調し、それを仏教のより厳密で哲学的な教えの源であり、それを保証するものであると看なしている、とグリッフィス教授は考える。このように考えて著者は、本書でインド仏教に於ける哲学的な理論と瞑想行との関係に関する事例研究を行うことを試みようとするのである。だからと言って著者は、特定の瞑想行が直接的に特定の教義を生みだしたというように短絡的に考えているわけではない。

哲学的な理論と瞑想法との関係を著者は次のように考えている。即ち、哲学的な信念が瞑想法に具体的な形態を与え特定の予期を与えることによって、実際に形成される様々な経験と、それらの経験からもたらされる哲学的な結論の上に、それらの

形成に関わるような影響を与える。同様に、瞑想行の結果も修行者の哲学的な考え方に新たな経験をうえつける。このようにして、哲学体系が修正され展開されていくべき新たな方向性が差し示される。

このような関係が哲学的な理論と瞑想法との間に存在すると仮定し、その仮定を特定の事例に適用してみるという試みは、確かに著者の言うように、これまであまりなされたことはなかった。しかしそのような試みが皆無であったわけではない。例えば、L. Schmithausen, "Spirituelle Praxis und philosophische Theorie im Buddhismus," *Zeitschrift für Missionswissenschaft und Religionswissenschaft*, Heft 3, 1973, pp. 161–186. を同様の関心をもって行われた研究の嚆矢とも言うべき優れた論攻として挙げることができる。この論攻を予てより高く評価している筆者には、行法との関係から仏教の教義を検討しようとする著者の試みは、それ自体たいへん興味深いものであり、本書を紹介したいと思うに至った理由の一つでもある。

ところで著者がその事例として用いようとする滅尽定およびその同義語である想受滅（saṃjñāvedayitanirodha）は、テクストの最古層に根づく用語であり、テクストも仏陀自身に帰している。にも拘らずこの語の持つ特異な性質は、それが主流の仏教解脱論と何ら明らかな関係を持っていないという事実と相俟って、当初から仏教教義学者たちに一連の問題を投げかけて来た。

問題の一つは、解脱の本質に関係する。つまり、物事の在り方に関する公正な認識（如実智見）を解脱に不可欠な構成要素とするという考え方と、あらゆる精神的機能が停止した完全な無意識を解脱の本質とするという考え方との、これら二つの考え方の間には或る緊張関係が存在すると思われる。従ってこれは、仏教の解脱論の問題であり、様々な相互に異なり矛盾しさえする解脱への行法によって惹き起こされる問題である。

第二の問題は、仏教思想家たちが考えている心と身体の関係に関するものである。もし経典が言うように、全ての心的事象が停止するような状況が実際に存在し、そしてもしその状況が一時的で可逆的なものであるとすれば、そのような事の起こる構造が説明されなければならない。心的事象は物的事象しか存在しえない場合にどのようにして再び生起し得るのか。著者はこのような問題を含んだ滅尽定に関する議論の分析のみに本書の研究課題を限定している。そのことが本書の論旨を明快なものにしている。

主たる資料としては(1)パーリ経典とブッダゴーサの注釈、『清浄道論』とそのダンマパーラの注釈〔本論第一章の内容を成す〕(2)『倶舎論』とその安慧及び称友の注釈〔本論第二章〕(3)及び唯識諸論書とが用いられる。〔本論第三章。以下本書の内容を概略紹介すると、第四章でそれまでの章で述べられた滅尽定と心身問題がまとめて論じられ、次いで以下のような項目が付されている。Glossary, Abbreviations, Appendix A（『倶舎論』に基づく修道次第の図表）、Appendix B（『倶舎論』第二章四四偈d句に対する世親の自注の Skt. Text と英訳、及び、称

友と安慧の注釈による補注)、Appendix C(『阿毘達磨雑集論』Tatia, ed., *ll.* 18-13, 20, アーラヤ識の八種の存在論証の箇所の Skt. Text, 英訳、及び注解)、Introduction を初め各章の注、Texts の Bibliography, 参考文献の Bibliography]

本書は以下の三つの事柄を目的としている。(1)意識が変化した或る特定の状態と、その特定の状態が解脱に関する特定の目標に対してどういう関係を有しているか、ということについての仏教の解釈の歴史に光を当てること。(2)その意識の変化した状態に関する議論を分析することによって、物的存在と心的存在との関係が初期仏教に於いてはどのように認識されていたか、その認識の仕方に関するわれわれの理解を深めること。(3)心的存在と物的存在の因果関係に関する仏教の考え方の妥当性を問題とし、それに答える試みを行うこと。

著者は、第三の目標は哲学的な困難さを伴うものであり、方法論上の注意が必要であることを断り、以下かなりの紙面を割いて彼の方法論を論じている。筆者としては、与えられた紙面の制約上、本論の紹介に進むべき所であろうが、著者の方法論に対する先鋭な問題意識を露に示していること、またそれが本書を著作するための原動力ともなっているように思われること、及び以下に述べるようなアメリカと日本の仏教学の状況などから、ここでは敢えて彼の方法論を紹介することとしたい。

第三八回の日本印度学仏教学会学術大会の特別企画として《私にとって仏教研究とは何か》というテーマのもとにシンポジウムが開かれた。三名の発題者の発表の中で、筆者にはミシガン大学のルイスO・ゴメス教授の「仏教の学問的研究：研究の目標と原則」と題する論述は、教授の仏教学の方法論をパーリ経典の分析の仕方を通して具体的に提示された極めて興味深いものであった。おそらくこれまでそのように本格的に学問的なレベルで、仏教学の方法論が議論されたことはなかったのではなかろうか。教授の方法論の特徴は、現象学や解釈学や構造主義や脱構築主義 (Deconstruction) など広汎な哲学理論を自家薬籠中のものとして用いた文献研究にある。教授が時間的にも遠く離れたインド仏教を自己の思想とするために、仏教研究の傍らディルタイの哲学を学生時代から学んできたことを曾て聞いたことがあるが、幅広い研究に基づいた方法論も単に研究のための方法ではなく、教授の仏教理解にとって必然的な方法、謂わば実存的な方法として造り上げられてきたものであることが当日の発表からも充分に伺える。そのような方法論に基づいて教授は、経典などのテクストは、たとえそれが〝理想的に正しい！〟読まれ方をしたとしても必ずしも唯一の意味のみを読者に与えるものではないことを主張する。そのような客観主義或いは絶対主義を排して、テクストを相対化しようとする。つまりテクストを読者との相対関係の中で構築されるものとして捉えようとするのである。

ゴメス教授の発表に関説したのは、教授の方法論の中にグリッフィス教授の方法論と対象的な特徴を感じるからである。一方は今や一国を代表する学者として、他方は新進気鋭の学者として、今後のアメリカの仏教学を推進していくであろう二人の

研究者が、ほぼ時を同じくして、相反する立場から方法論に関する示唆に富む優れた論攻を著したことは極めて興味深いことである。本論の紹介を割愛してもグリッフィス教授の序論に説かれる方法論を紹介したいと考える所以である。

著者は初めこの研究を、瞑想行に関してインド仏教に於いてなされた議論を、歴史学的且つ経典解釈学的に考察するという仕方で遂行しようと考えていた。しかしそれは当初考えていたテクストを解説し歴史的に研究するということでは収まらず、異文化を通じて行われる哲学的思索を事とする研究となるに至った。それ故、本書に見られる哲学的思索は、理性的思考(rationality)に関する一般的で重要な命題に基づくものであり、同時にそれを説明するものでもある。その命題とは端的に言えば、哲学とは異文化を通じて行われる人間の営為であり、それはいかなる文化であれその全ての本質的な要素の中に、約束事の範囲を同じくし規範を同じくして作用するものである、ということである。このような約束事と規範とは、西洋で時として理性的思考と呼ばれてきたものの境界をはっきり定めるものである。

著者は、哲学をこのように定義づけることが、哲学、人類学、社会学、歴史学(殊に宗教史学)、文芸批評の分野に於ける現代西洋のアカデミックな研究の権威者たちの反対を受けるであろうことを予想している。彼が自分の考え方に異を唱える思想傾向として想定しているのは、知識社会学、ヴィトゲンシュタインとクワインの浅薄な理解、人類学理論に於ける様々な相対主義への固執、初期のクーンやファイヤーベント(Feyerabend, P. K.)をめぐる科学哲学の分野における喧騒な議論、あらゆるジャンルのテクストを脱構築主義的に読もうとする流行といったものである。著者の考えでは、これらの思想傾向が寄り集まって、理性的な言葉による思想の論述は、異文化間に於いても相当似かよった原則に基づき且つ実際上は同一の目標を以て働く現象であり、異文化間の交流や評価のために比較的直接的な仕方で使用し得る手段ともなるものである、ということを示唆することすら問題視されるような思潮を産み出してきたのである。ここに著者の現代欧米の思想界の傾向に対する強い批判が読み取れる。著者は、哲学的な見解や議論は文化を異にする場合にも評価の可能なものであるという強固な認識に立っている。そういう立場からすれば、二十世紀の英語を話す一人の西洋人である著者が、例えば五世紀のインドの仏教徒によるサンスクリット語での著作や思考によってなされた哲学的な議論や結論に対して、それを理解し判定を下すということが理論的には可能なこととなる。

著者は以上のような確認に基づいて、時間的にも空間的にも自己の文化とは離れた文化に属する哲学的な議論に対しては、それを歴史学的、解説的に記述することを捨てて、部分的にはそれらに対して判定を下すことにも関わるような、それらの議論の分析的批判的な研究へと転じていくことこそ然るべきことであり、仏教研究もそうあるべきであると主張する。しかしそう主張する場合には、それに伴う体系的に解決しなければなら

ない幾つかの重要な問題があるであろう。著者は幾つかの問題を例示している。即ち、理性的思考の機能や目標や限界が異文化間で実際上同じような仕方で理解されるか否かという問題、命題に於いては真理、論証に於いては価値を、文化を異にして評価する場合、その評価が偏狭さや傲慢さの陥穽を免れ得るかどうかという問題、特定の確信を持つための偶然的な根拠とそうではない根拠との区別はあるのかどうかという問題などである。このような問題は理想的には体系的に解決さるべきである。そしてそのようにしてのみ多元論的見解に固執する人々の反論に正しく答えることが出来る。

本書ではそのような過大な問題に答える代わりに、本書で取り扱う資料中の議論と結論を批判的に評価しようという試みが提示される。そうすることによって、理性を根拠として物事の規準を確立しようとする論議が、異文化間の哲学的思索活動を理解するためには、ふさわしい手段であるというテーゼが正しいことの間接的な証拠を提示する試みとして、最もよく理解される。少なくともここで論ずるような種類の事例研究を効果的に完成させようとすれば、相異なる文化とその理性的思索の規準は元来同じ規準では量れないものであるというテーゼの誤りであることを必然的に認めなければならなくなる、というのが著者の考えである。

以上が著者ポールJ・グリッフィス教授の提示する仏教研究の方法論である。教授は西洋の仏教学会で極めてしばしば見られる、テクストを哲学的に真摯に取り扱うことを拒むような〝謙虚さ〟を拒否することを宣言している。

教授のテクストに対する態度は、それがどのような文化に属するものであれ、理性的に思想を論述するものである限り、自己の文化に於けると同様の原則と目標を以て著されたものであると考えることができる、とする確信に裏づけされている。従って、読み手としての教授は、テクストに説かれる物事に関して理性的に規準を確立していくような論述をなすことが、文化を異にする哲学的思索を理解する手段となると考えるのである。確かに教授の言うように、テクストを哲学的に真摯に取り扱うことを拒むような〝謙虚さ〟は退けらるべきである。しかし哲学的にテクストを取り扱うこと、つまりテクストに説かれている事柄に理性的に規準を設けていくという行為は、何によってその妥当性を保証されるのであろうか。果たして思想を理性的に言葉によって伝達するという行為は、教授の言うように本当に、相当似かよった原則や実際上は同一の目標によって作用すると言えるのであろうか。このような問題は、教授の言うように、体系的に解決さるべき問題であり、そのようなことを本書は目的としていない。教授は事例研究の過程を示すことによって自己の見解が正しいことの具体例を提供しようとしたのである。従って教授の論証過程を追ってその見解の当否をその都度確かめていくべきであるが、今はその余裕はない。

さてわれわれは、一方に於いてゴメス教授によって示されたような、テクストを読者との相対的な関係の中で存在するものとする考え方と、もう一方に於いてグリッフィス教授のように、

それに対して理性的に規準を確立してゆくべき対応物として客観的に存在するものとする考え方との、そういう二通りのテクストに対する考え方を提示されたわけである。私は今、このようなことを更に考えながら改めて本論を読み返してみようと思っている。

（一九八七年九月五日脱稿）

「佛教学セミナー」バックナンバー発売中

既発行の「佛教学セミナー」のバックナンバーを御希望の方は，仏教学会または文栄堂書店に申し込み下さい。二冊以上お申し込みの方には送料を当方で負担します（一冊のみの場合，送料50円）。

1〜14, 22, 23号	品切れ	21，24号	600円
15〜17号	350円	25〜31号	700円
18〜19号	400円	32〜38号	800円
20　号	品切れ（特集号）＊	39〜45号	1000円

＊第20号は特集号につき，別に単行本として文栄堂書店より刊行（品切れ）。
※既刊号の総目次は本誌26号に掲載されています。
24，43号は残部僅少です。